

分離派 建築会 の展開

新しい都市と社会をめざして

日時 | 2019年10月26日 土 13:30-17:30

場所 | 東京都市大学 世田谷キャンパス2号館 21C
東京都世田谷区玉堤1丁目28-1

定員 | 100名(先着順) / 参加費無料

主催 | 分離派100年研究会 <http://bunriha.com>

問合せ | 東京都市大学 岡山研究室 okayamalab20@gmail.com

20世紀に入り共産党宣言に触発され、幾多の‘宣言’がなされた。大正7年(1918)には、東京帝国大学法科の学生を中心として結成された新人会が‘宣言’し、その2年後に分離派建築会も‘宣言’を上梓した。相次いで結成された二つの会であるが、分離派建築会は、社会的、政治的態度を表明しなかった。それは弱点でもあったが、それゆえに7回も展覧会を開くことができたのかもしれない。しかしながら、その展覧会がまさに実社会へ開かれた扉となったのである。特に関東大震災後の彼らの活動は、実践的となっていく。彼らは、公共建築、住宅などの実作、建築教育、執筆活動などを通して社会へのコミットメントを果たしていく。「新しい」という言葉がまさに新しく新鮮に響いていたこの時期、欧米の新たな動向、DWB(ドイツ工作連盟)、バウハウスなどに影響された思想、合理主義によって幾何学的な建築表現も生み出されていく。

本シンポジウムでは、分離派建築展第2回展から参加した濱岡(蔵田)周忠、第4回展からの岡村蚊象(山口文象)、第6回展からの川喜田煉七郎を中心として、新しい都市生活における諸問題をいかに解決しようとしたのか、その試みについて考えてみたい。

PROGRAM

司会 角田 真弓 / 東京大学
開会 岡山 理香 / 東京都市大学
閉会 本橋 仁 / 京都国立近代美術館

第1部 各論発表 13:40-16:15

岡山 理香 / 東京都市大学 13:40-14:10

「建築的なもの」から「建築」へ - 蔵田周忠の実験的活動

「当時、分離派を生んだウーヴンが日本の関係者に羨望のまなざしで学ばれ語られる中で、蔵田周忠は1919年に設立されたバウハウスの理念を語る高等工芸ただ一人の教官だった」と語ったのは、豊口克平である。豊口は、蔵田周忠(1895-1966)が講師を務める東京高等工芸学校の教員で1928年(昭和3)に結成された「型而工房」の一員でもある。蔵田とその教え子たちは、新しい時代に即した住空間と生活の問題を解決するためにこの工房を立ち上げた。その4年後には、住宅生産の合理化をはかることを第一の目標として「日本トロッケンバウ研究会」が結成された。本シンポジウムでは、分離派建築会のメンバーであった蔵田周忠が「建築的なもの」への憧れから実際の「建築」、特に人々の住まいへと関心を寄せていった軌跡を辿り、「型而工房」と「トロッケン・バウ(乾式工法)」という実験的活動が今日の私たちの生活へと続く道を切り開いたであろうことを検証してみたい。

梅宮 弘光 / 神戸大学 14:10-14:50

表現から構成へ - 川喜田煉七郎におけるリアリティの行方

芸術家が創造に向かうとき、いったん現実生活から身を退き自己の内面世界に沈潜して、そこで経験するさまざまな感情にかたちを与えようとする。川喜田煉七郎(1902-75)の活動もそのように始まった。作曲家山田耕筰が書いた奇妙な音楽ホールの話に基づいて描かれたドローイング「霊楽堂」(1926年)である。川喜田は公募を始めた分離派建築会第6回展に応募し入選する。堀口捨己には「情感の籠つた非常に真摯な雄作」と賞された。ここから川喜田のモダニズム建築運動が始まるが、新興建築家連盟の解散以降、川喜田は建築構想を一切やめた。かわって始められたのは、バウハウスの予備課程に倣った「構成教育」であり、そのあとに始まる店舗能率研究である。それは、内面世界に沈潜するのではなく、現実のリアルから新たな別の現実を構成する営為だった。川喜田のこの転位は、しかし、分離派建築会への当初の憧憬なしには生じ得なかった。その後の彼を駆動したのは、自身の内に最初に抱え込んでしまった分離派的なものに対する反発にほかならない。同種の磁極が退け合うごとくである。

佐藤 美弥 / 埼玉県立文書館 15:05-15:45

建築実践へ - 山口文象と創宇社建築会の建築認識

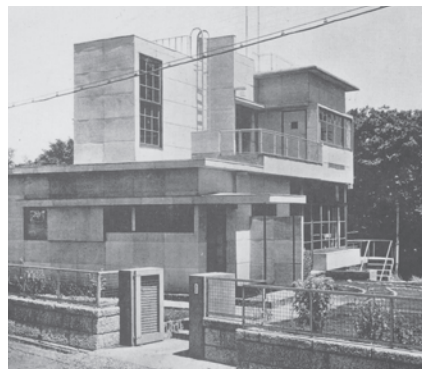
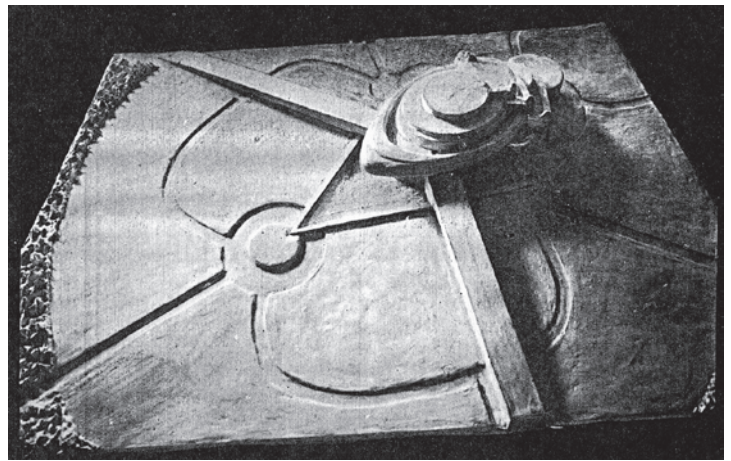
分離派建築会に第4回展覧会(1924年11月)から参加した山口文象(1902-1978)は、徒弟学校卒業のノンエリートであった点で分離派のなかでも独特の位置を占める。山口は1923年9月1日に発生した関東大震災の直後に、逓信省の営繕部門で製図工や現場監督として働く仲間たちとともに創宇社建築会を結成し、1930年までに8回の展覧会を開催した。ここでは山口と創宇社の建築認識の展開とそこでの都市生活への視角について考察する。

これまで、また現在においても、創宇社の活動は分離派の模倣として始まり、彼らの社会的な、また建築界における立場を背景に社会改革を目指す方向へ転回していくとされてきた。そしてその活動は建築界へのインパクトという尺度で計られ、デザインの変革に寄与しなかったあだ花的存在として評価されてきた。果たして創宇社とは分離派の模倣でしかなかったのだろうか。あらためて山口と創宇社の作品と言説から考えたい。

田所 辰之助 / 日本大学 15:05-15:45

「都市」に託されたもの - 滞独時代の山口文象の軌跡

それまでの展覧会活動に加え、創宇社建築会が「新建築思潮講演会」を開催したのが1929年(第1回)および1930年(第2回)だった。山口文象はそれぞれ「合理主義反省の要望」「新興建築家の実践とは」を講演し、近代建築の新たな理論的枠組みを希求する姿勢を鮮明にした。第2回講演会を終えた2ヵ月後、山口はドイツへ旅立つ。滞独時代の山口については、数冊の日記、ノート類が残されていて、その関心の所在を追うことができる。山口の目はソビエト連邦の都市計画へ向けられ、渡っていたエルンスト・マイによるベルリンでの講演記録などがくわしく報告されている。近代建築をとらえ直していくために、山口は「都市」に何を見い出そうとしたのか。分離派建築会は1928年の第7回展覧会でその活動を休止させ、1930年には新興建築家連盟の設立が不調に終わった。1920年代末における日本の近代建築運動の転回を、山口の滞独時代の活動とその軌跡を通じて逆照射していきたい。



上: 霊楽堂 / 1928 / 川喜田煉七郎 / 『建築畫報』第19巻第8号
左中: 古仁所邸 / 1936 / 蔵田周忠 / 蔵田周忠文庫
右中: 創宇社第4回展覧会ポスター / 1926 / 竹村文庫
左下: 型而工房パンフレット / 1928 / 蔵田周忠文庫

第2部 ディスカッション

16:30-17:30

「新しい生活空間の創造をめざして」

パネリスト 梅宮弘光 佐藤美弥 田所辰之助 岡山理香
モデレーター 杉山真魚 / 岐阜大学

併催

蔵田周忠文庫見学会

場所 東京都市大学 世田谷キャンパス 図書館 蔵田周忠文庫

時間 10:30-11:30 定員 30名

<http://bunriha.com>よりメールにて事前にお申し込みください。

申し込み多数の場合、抽選となりますので、あらかじめご了承ください。

創宇社建築会関連資料パネル

場所 東京都市大学 世田谷キャンパス 2号館ホワイエ

構成 佐藤美弥

創宇社建築会に参加した建築家竹村新太郎が残した資料群について写真で構成するパネルで紹介いたします。